

平成24年度医工学概論

流れの計測融合シミュレーションの 理論的枠組み

2012年6月15日

東北大学
流体科学研究所
早瀬 敏幸

講義内容

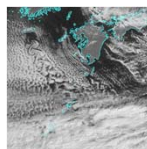
1. はじめに
2. 計測融合シミュレーションの理論的枠組み
 - 2.1 シミュレーションによる実現象の再現
 - 2.2 順問題と逆問題
 - 2.3 計測融合シミュレーションの定式化
3. 計測融合シミュレーションによる血流解析
 - 3.1 はじめに
 - 3.2 超音波計測融合シミュレーション
 - 3.3 おわりに
4. まとめ

1. はじめに

背 景

流れの実現象の再現が重要な分野

- 気象予報



高知大学
ホームページ

- 流れの制御



- 医療支援

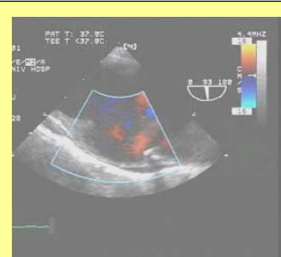
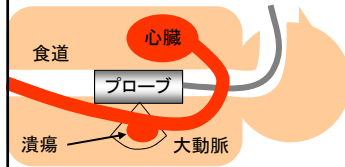


- 大規模システムの異常同定



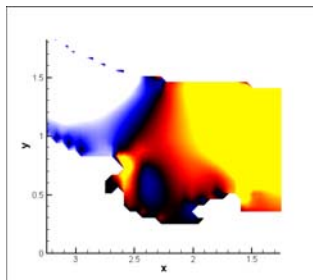
1940年アメリカ
Carleton
University
ホームページより

計測融合シミュレーションを応用した血流可視化診断装置

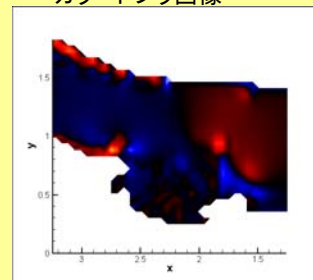


カラードプラ画像

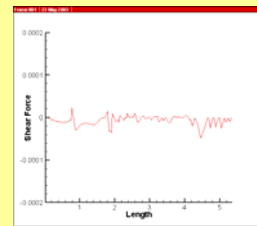
実験装置



通常のシミュレーション



計測融合シミュレーション



血管壁せん断応力

ハイブリッド風洞によるカルマン渦列のリアルタイム解析



実現象を再現するための手法

- 計測
- 理論解析
- 数値シミュレーション
- ティホノフ正則化

B. Zeldin and A. Mead, AIAAJ. 35-11, 1997, 1787-1790.

- PTV(可視化流れ計測)とCFDの融合手法

T. Ido, Y. Murai, F. Yamamoto, Experiments in Fluids, 32, 2002, 326-336.

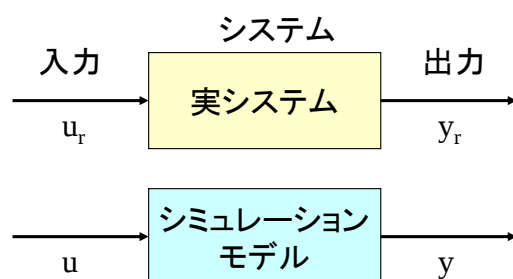
- 4次元変分法
- オブザーバ、カルマンフィルタ、計測融合シミュレーション
- ニューラルネットワーク

2. 計測融合シミュレーションの 理論的枠組み

- 2.1 シミュレーションによる実現象の再現
- 2.2 順問題と逆問題
- 2.3 計測融合シミュレーションの定式化

2.1 シミュレーションによる実現象の再現

シミュレーションで実現象を再現するのは難しい！



ポイント： 誤差($y - y_r$)のダイナミックスを考える

誤差ダイナミクス

簡単のため線形系で考える。状態変数 x 自身を出力と考える。

実システム: $\frac{dx_r}{dt} = Ax_r + Bu_r$

シミュレーション: $\frac{dx}{dt} = Ax + Bu$

誤差ダイナミクス: $\frac{d}{dt}(x - x_r) = A(x - x_r) + B(u - u_r)$

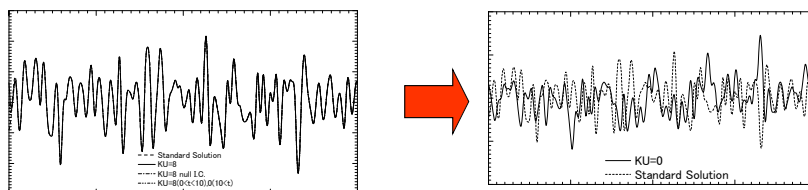
解は $x - x_r = e^{At}(x - x_r)_{t=0} + \int_0^t e^{A(t-\tau)} B(u - u_r) d\tau$

システム行列 A に不安定な固有値があると、初期条件および入力の誤差は指数関数的に増加する

誤差ダイナミクス

システム行列 A に不安定な固有値があると、初期条件および入力による誤差は指数関数的に増加する

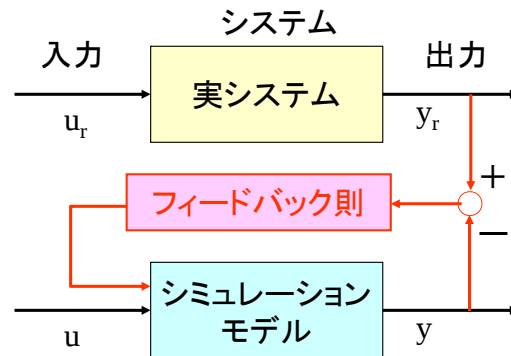
$$x - x_r = e^{At}(x - x_r)_{t=0} + \int_0^t e^{A(t-\tau)} B(u - u_r) d\tau$$



初期値は非常に近くても、時間がたつと全く異なった解になる

天気予報は難しい！

出力誤差をフィードバックすると解決できる！
(オブザーバ)



ポイント： 誤差\$(y - y_r)\$のダイナミクスを考える

誤差ダイナミクス

実システム： $\frac{dx_r}{dt} = Ax_r + Bu_r$

$$y = Cx, \\ y_r = Cx_r$$

オブザーバ： $\frac{dx}{dt} = Ax + Bu - K(y - y_r)$

誤差ダイナミクス： $\frac{d}{dt}(x - x_r) = A(x - x_r) + B(u - u_r) - K(Cx - Cx_r)$

$$\frac{d}{dt}(x - x_r) = (A - KC)(x - x_r) + B(u - u_r)$$

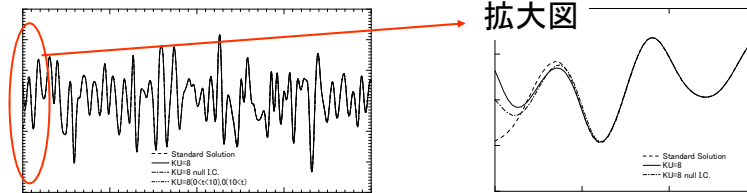
解は $x - x_r = e^{(A - KC)t} (x - x_r)_{t=0} + \int_0^t e^{(A - KC)(t-\tau)} B(u - u_r) d\tau$

フィードバックゲイン行列Kを適当に選んで、\$(A - KC)\$の固有値の実部を全て負に設定できれば、任意の初期条件から誤差は0に収束する。

誤差ダイナミクス

フィードバックゲイン行列Kを適当に選んで、 $(A-KC)$ の固有値の実部を全て負に設定できれば、任意の初期条件から誤差は0に収束する。

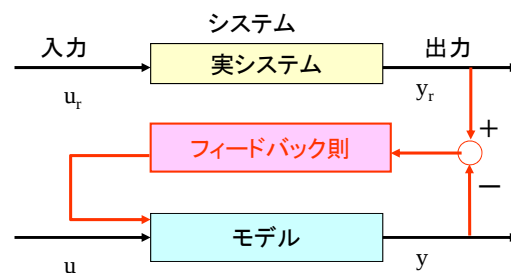
$$x - x_r = e^{(A-KC)t} (x - x_r)_{t=0} + \int_0^t e^{(A-KC)(t-\tau)} B(u - u_r) d\tau$$



異なる初期値から、正しい解に収束する

- ポイント:
- オブザーバはフィードバックによりシミュレーションとは異なる誤差ダイナミクスをもつ。
 - ただし、誤差の収束後はフィードバック量も0になる！

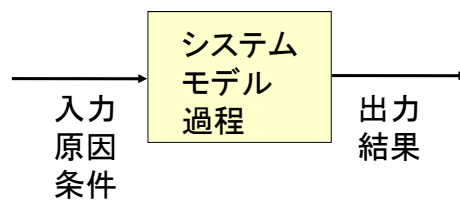
計測融合シミュレーションはオブザーバの一種



	モデル	フィードバック	
オブザーバ	線形微分方程式	極配置	Luenberger (1964)
カルマンフィルタ	線形微分方程式	最適設計	Kalman (1960)
拡張カルマンフィルタ	非線形モデル	最適設計	
計測融合シミュレーション	CFDモデル	比例制御	

2.2 順問題と逆問題

順問題と逆問題

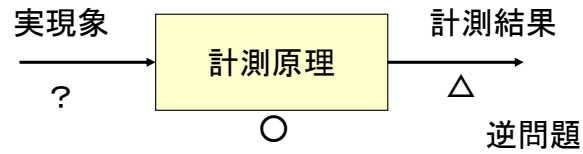


	入力	システム	出力	例
順問題	○	○	?	予測
逆問題(1)	?	○	○	制御
逆問題(2)	○	?	○	設計

一般に、逆問題は順問題に比べて難しい
ポイント： 存在、一意性、安定性

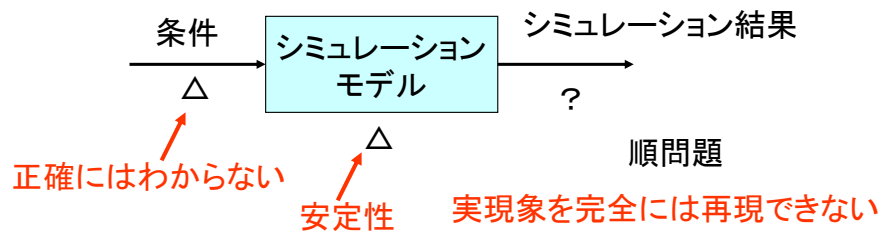
実現象の解析手法の比較(1)

1. 計測



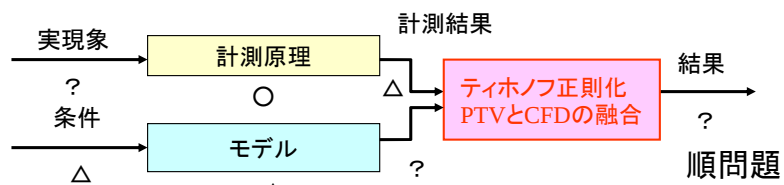
実現象を完全には再現できない

2. 数値シミュレーション



実現象の解析手法の比較(2)

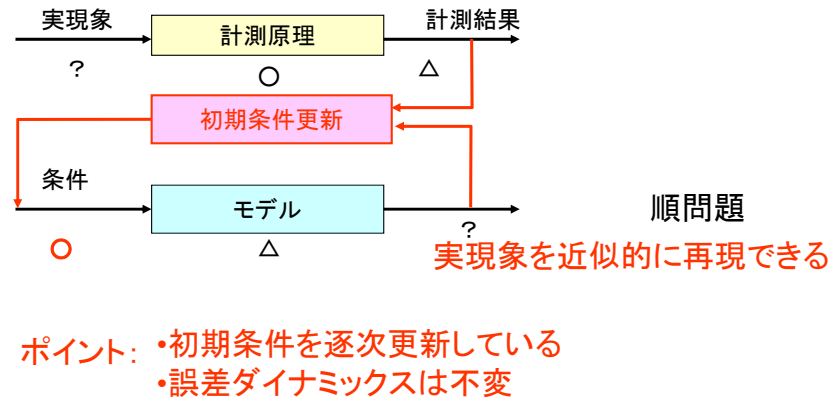
3. ティホノフ正則化、PTV(可視化流れ計測)とCFDの融合手法



実現象を近似的に再現できる

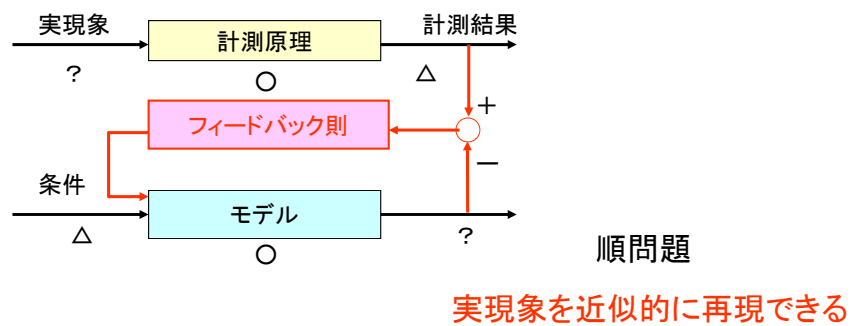
実現象の解析手法の比較(3)

4. 4次元変分法



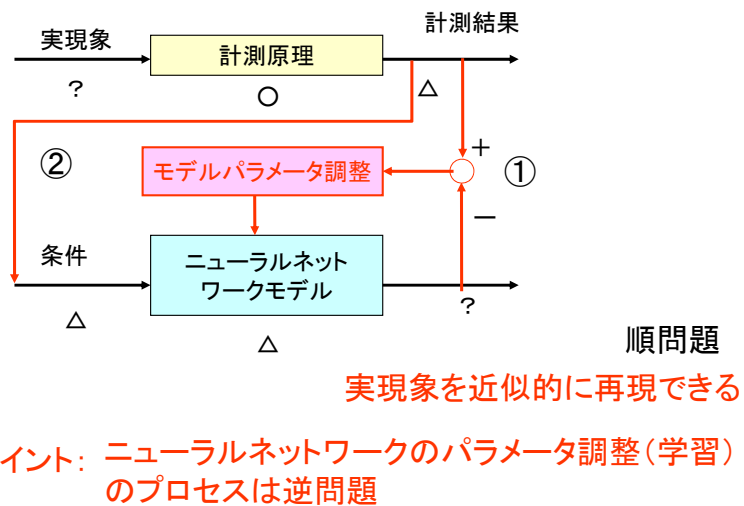
実現象の解析手法の比較(4)

5. オブザーバ



実現象の解析手法の比較(5)

6. ニューラルネットワーク



2.3 計測融合シミュレーションの定式化

(速度誤差をNavier-Stokes式にフィードバックした場合)

- Navier-Stokes式に速度のフィードバックを施した定式化を行う。
- 一般の計測融合シミュレーションではNavier-Stokes式と圧力方程式それぞれに、速度誤差と圧力誤差に基づくフィードバックを行う。

1. 流れ場の基礎式(1)

非圧縮粘性流体の非定常流を対象とする

Navier-Stokes式 (u :速度ベクトル、 ν :動粘度、 p :圧力を密度で除したもの、 f :外力)

$$\frac{\partial u}{\partial t} = -(u \cdot \nabla)u + \nu \Delta u - \nabla p + f \quad (1.1)$$

ここで $\nabla = \frac{\partial}{\partial x_1} \mathbf{i} + \frac{\partial}{\partial x_2} \mathbf{j} + \frac{\partial}{\partial x_3} \mathbf{k}$: ハミルトニアン

$\Delta = \nabla \cdot \nabla = \frac{\partial^2}{\partial x_1^2} + \frac{\partial^2}{\partial x_2^2} + \frac{\partial^2}{\partial x_3^2}$: ラプラシアン

連続式

$$\nabla \cdot u = 0 \quad (1.2)$$

式(1.1)の発散divをとると圧力方程式が得られる

$$\Delta p = -\nabla \cdot \{(u \cdot \nabla)u\} + \nabla \cdot f \quad (1.3)$$

流れ場の基礎式(2)

初期条件 (V : 領域)

$$u(0, x) = u_0(x) \quad x \in V \quad (1.4)$$

境界条件 ($\partial V = \partial V_1 + \partial V_2$: 境界)

$$u(t, x) = u_B(t, x) \quad x \in \partial V_1 \quad (1.5.1)$$

$$p(t, x) = p_B(t, x) \quad x \in \partial V_2 \quad (1.5.2)$$

(1.5.1)式は(1.1)式を用いて圧力のノイマン条件に変換される。

$$\nabla p|_{\partial V_1} = \left\{ -\frac{\partial u}{\partial t} - (u_0 \cdot \nabla)u + \nu \Delta u + f \right\} \Big|_{\partial V_1} \quad (1.5.3)$$

上記の初期条件および境界条件の取扱いについては、Appendix(A.1)参照のこと。

2. 実現象

実現象の基礎式として、式(1.1)～(1.5)を再記する。

$$\frac{\partial u}{\partial t} = -(u \cdot \nabla)u + \nu \Delta u - \nabla p + f \quad (2.1)$$

$$\nabla \cdot u = 0 \quad (2.2)$$

$$\Delta p = -\nabla \cdot \{(u \cdot \nabla)u\} + \nabla \cdot f \quad (2.3)$$

初期条件 (V : 領域)

$$u(0, x) = u_0(x) \quad x \in V \quad (2.4)$$

境界条件 ($\partial V = \partial V_1 + \partial V_2$: 境界)

$$u(t, x) = u_B(t, x) \quad x \in \partial V_1 \quad (2.5.1)$$

$$p(t, x) = p_B(t, x) \quad x \in \partial V_2 \quad (2.5.2)$$

$$\nabla p|_{\partial V_1} = \left\{ -\frac{\partial u}{\partial t} - (u \cdot \nabla)u + \nu \Delta u + f \right\} \Big|_{\partial V_1} \quad (2.5.3)$$

2. 実現象(2)

式(2.1)～(2.3)を以下のように簡略化する。

$$\frac{\partial u}{\partial t} = g(u) - \nabla p + f \quad (2.6)$$

$$\nabla \cdot u = 0 \quad (2.7)$$

$$\Delta p = q(u) + \nabla \cdot f \quad (2.8)$$

ここで、

$$g(u) = -(u \cdot \nabla)u + \nu \Delta u \quad (2.9.1)$$

$$q(u) = -\nabla \cdot \{(u \cdot \nabla)u\} \quad (2.9.2)$$

3. 数値シミュレーション

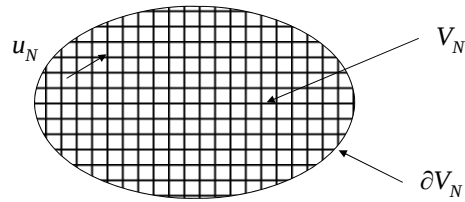
領域 V および境界を離散化する。

$V + \partial V$ 上の $u(t, x)$ に対応する、 $3N$ 次元ベクトルを u_N とする。

$V, \partial V$ の離散点からなる集合を $V_N, \partial V_N$ とする。

$V_N + \partial V_N$ の部分集合 M の値からなる u_N の部分ベクトルを u'_{NM} とする。

(N : 格子点数)



3. 数値シミュレーション(2)

式(2.6)～(2.9)に対応するモデルを次式(3.1)～(3.4)で表す。

$$\frac{du_N}{dt} = g_N(u_N) - \nabla_N p_N + f_N \quad (3.1)$$

$$\nabla_N^T u_N = 0 \quad (3.2)$$

$$\Delta_N p_N = q_N(u_N) + \nabla_N^T f_N \quad (3.3)$$

ここで

$$g_N(u_N) = -(u \cdot \nabla)_N u_N + \nu \Delta_N u_N \quad (3.4.1)$$

$$q_N(u_N) = -\nabla_N^T (u \cdot \nabla)_N u_N \quad (3.4.2)$$

∇_N, Δ_N はそれぞれ ∇, Δ の離散表現の $3N \times N, N \times N$ 次行列であり、離散化の方法（中心差分、高次風上差分、...等）により異なった形式となる。

3. 数値シミュレーション(3)

初期条件

$$u_N(0) = u_{N0} \quad (3.5)$$

境界条件

$$u'_{N\partial V_{1N}}(t) = u_{BN}(t) \quad (3.6.1)$$

$$p'_{N\partial V_{2N}}(t) = p_{BN}(t) \quad (3.6.2)$$

$$\nabla_N p_N|_{\partial V_{N1}} = \left\{ -\frac{\partial u'_N}{\partial t} - (u \cdot \nabla)_N u_N + \nu \Delta_N u_N + f_N \right\} \Big|_{\partial V_{1N}} \quad (3.6.3)$$

式(3.1)～(3.3)には上記の境界条件が適切に組み込まれているものとする。

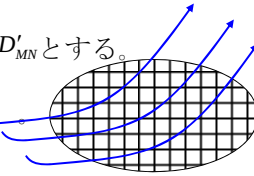
4. 実現象の離散化

実現象から、3. で定義された N 個の格子点上での値を抽出する写像を D_N とする。

(理想的な計測と考えられる)

また、部分集合 M 内の離散点の値を抽出する写像を D'_{MN} とする。

式(2.6)～(2.8)に D_N を作用させる (外力 f は0とする)。



$$\frac{d}{dt} D_N(u) = D_N(g(u)) - D_N(\nabla p) \quad (4.1)$$

$$D_N(\nabla \cdot u) = 0 \quad (4.2)$$

$$D_N(\Delta p) = D_N(q(u)) \quad (4.3)$$

4. 実現象の離散化(2)

初期条件

$$D_N(u(0, x)) = D_N(u_0(x)) \quad (4.4)$$

境界条件

$$D'_{N\partial V_1}(u(t, x)|_{\partial V_1}) = D'_{N\partial V_1}(u_B(t, x)) \quad (4.5.1)$$

$$D'_{N\partial V_1}(p(t, x)|_{\partial V_1}) = D'_{N\partial V_1}(p_B(t, x)) \quad (4.5.2)$$

$$D'_{N\partial V_1}(\nabla p|_{\partial V_{N1}}) = D'_{N\partial V_1}\left(\left\{-\frac{\partial u}{\partial t} - (u \cdot \nabla)u + \nu \Delta u\right\}\right)_{\partial V_{1N}} \quad (4.5.3)$$

5. 理想的シミュレーション

今後の解析の準備として、「理想的シミュレーション」を次のように定義する。

【定義】

数値シミュレーションの初期条件および境界条件が実現象の値と一致し、さらに実現象の格子点上の値がシミュレーションの解となる場合に、理想的シミュレーションと呼ぶ

この定義より、理想的シミュレーションでは実現象の格子点の値 ($D_N(u)$ 等) を数値シミュレーションのモデル、式(3.1)～(3.3)の u_N の部分に代入した式が成立する。

$$\frac{d(D_N(u))}{dt} = g_N(D_N(u)) - \nabla_N(D_N(p)) \quad (5.1)$$

$$\nabla_N^T D_N(u) = 0 \quad (5.2)$$

$$\Delta_N D_N(p) = q_N(D_N(u)) \quad (5.3)$$

5. 理想的シミュレーション(2)

式(5.1)と式(4.1)の左辺がそれぞれ等しいので

$$g_N(D_N(u)) - \nabla_N(D_N(p)) = D_N(g(u)) - D_N(\nabla p) \quad (5.4)$$

初期条件

$$u_N(0) = D_N(u(0, x)) \quad (5.5.1)$$

または

$$u_N(0) = D_N(u_0(x)) \quad (5.5.2)$$

境界条件

$$u'_{N\partial V_{1N}}(t) = D_{N\partial V_1}(u(t, x)|_{\partial V_1}) \quad (5.6.1)$$

$$p'_{N\partial V_{2N}}(t) = D_{N\partial V_2}(p(t, x)|_{\partial V_2}) \quad (5.6.2)$$

$$\nabla_N D_N(p)|_{\partial V_{N1}} = \left\{ -\frac{\partial D'_{N\partial V_1}(u(t))}{\partial t} - D_N((u \cdot \nabla)u) + \nu(D_N(\Delta u)) \right\}|_{\partial V_{1N}} \quad (5.6.3)$$

6. 計測融合シミュレーション

数値シミュレーションのNavier-Stokes式の離散化式にフィードバックを加える。

$$\frac{du_N}{dt} = g_N(u_N) - \nabla_N p_N - \underline{K_u(u_M - u_{Mm})} \quad (6.1)$$

ここで、右辺第3項は速度ベクトルに関するフィードバック

K_u : $N \times M$ ゲイン行列

$$u_M = Cu_N \quad (\text{計算値}) \quad (6.2.1)$$

$$u_{Mm} = CD_N(u) + \varepsilon_u \quad (\text{計測値}) \quad (6.2.2)$$

C : $M \times N$ 行列 (計測可能な要素は1, その他の要素は0)

ε_u : 計測誤差

式(6.2)を式(6.1)に代入して,

$$\frac{\partial u_N}{\partial t} = g_N(u_N) - \nabla_N p_N - K_u C(u_N - D_N(u)) + K_u \varepsilon_u \quad (6.3)$$

6. 計測融合シミュレーション(2)

計測融合シミュレーションと実現象の差より **誤差ダイナミクス** (式(6.3)–式(4.1)) を求める。

$$\begin{aligned}
 \frac{d}{dt}(u_N - D_N(u)) &= g_N(u_N) - D_N(g(u)) - \nabla_N p_N + D_N(\nabla p) \\
 &\quad - K_u C(u_N - D_N(u)) + K_u \cdot \varepsilon_u \\
 \frac{d}{dt}(u_N - D_N(u)) &= g_N(u_N) - \underline{g_N(D_N(u))} + \underline{g_N(D_N(u)) - D_N(g(u))} \\
 &\quad - \nabla_N p_N + \underline{\nabla_N(D_N(p))} - \underline{\nabla_N(D_N(p)) + D_N(\nabla p)} \\
 &\quad - K_u C(u_N - D_N(u)) + K_u \varepsilon_u
 \end{aligned} \tag{6.4}$$

理想的シミュレーションでは、式(5.4)より二重下線部が0となる点に注意する。

下線部をTaylor展開し、2次以上の高次項を無視すると、

6. 計測融合シミュレーション(3)

$$\begin{aligned}
 \frac{d}{dt}(u_N - D_N(u)) &= g_N(u_N) - \left\{ g_N(u_N) + \frac{dg_N}{du_N} \bigg|_{u_N} (D_N(u) - u_N) \right\} \\
 &\quad + g_N(D_N(u)) - D_N(g(u)) \\
 &\quad - \nabla_N p_N + \{ \nabla_N p_N - \nabla_N(D_N(p) - p_N) \} \\
 &\quad - \nabla_N(D_N(p)) - D_N(\nabla p) \\
 &\quad - K_u C(u_N - D_N(u)) + K_u \varepsilon_u \\
 \\
 \frac{d}{dt}(u_N - D_N(u)) &= \left\{ \frac{dg_N}{du_N} \bigg|_{u_N} (u_N - D_N(u)) \right\} - K_u C(u_N - D_N(u)) \\
 &\quad - \{ \nabla_N(p_N - D_N(p)) \} \\
 &\quad + g_N(D_N(u)) - D_N(g(u)) - \nabla_N(D_N(p)) + D_N(\nabla p) \\
 &\quad + K_u \varepsilon_u
 \end{aligned}$$

6. 計測融合シミュレーション(4)

$$\begin{aligned}
 \frac{d}{dt}(u_N - D_N(u)) &= \left(\frac{dg_N}{du_N} \Big|_{u_N} - K_u C \right) (u_N - D_N(u)) \\
 &\quad - \nabla_N (p_N - D_N(p)) \\
 &\quad + g_N(D_N(u)) - \underline{D_N(g(u))} - \nabla_N(D_N(p)) + D_N(\nabla p) \\
 &\quad + K_u \varepsilon_u
 \end{aligned} \tag{6.5}$$

6. 計測融合シミュレーション(5)

以下では圧力方程式(3.3)を考える。

$$\Delta_N p_N = q_N(u_N) + \nabla_N^T f_N \tag{6.6}$$

$$\begin{aligned}
 \Delta_N p_N - \Delta_N D_N(p) + \Delta_N D_N(p) \\
 = q_N(u_N) - \underline{q_N(D_N(u))} + q_N(D_N(u)) + \nabla_N^T f_N
 \end{aligned} \tag{6.7}$$

下線__部をTaylor展開し、2次以上の高次項を無視すると、

6. 計測融合シミュレーション (6)

$$\begin{aligned}
 & \Delta_N (p_N - D_N(p)) + \Delta_N D_N(p) \\
 &= q_N(u_N) - \left\{ q_N(u_N) + \frac{dq_N}{du_N} \bigg|_{u_N} (D_N(u) - u_N) \right\} + q_N(D_N(u)) + \nabla_N^T f_N \\
 & \Delta_N (p_N - D_N(p)) \\
 &= \left\{ \frac{dq_N}{du_N} \bigg|_{u_N} (u_N - D_N(u)) \right\} + \underline{\underline{q_N(D_N(u)) - \Delta_N D_N(p) + \nabla_N^T f_N}} \quad (6.8)
 \end{aligned}$$

理想的シミュレーションでは、式(5.4)より下線部が 0 となる点に注意する。

Δ_N は正則なので逆行列を左から掛けると次式となる。

6. 計測融合シミュレーション (7)

$$\begin{aligned}
 p_N - D_N(p) &= \Delta_N^{-1} \left(\left(\frac{dq_N}{du_N} \bigg|_{u_N} \right) (u_N - D_N(u)) \right. \\
 & \quad \left. + q_N(D_N(u)) - \Delta_N D_N(p) + \nabla_N^T f_N \right) \quad (6.9)
 \end{aligned}$$

式(6.9)を式(6.5)に代入すると、

$$\begin{aligned}
 \frac{d}{dt} (u_N - D_N(u)) &= \left(\frac{dg_N}{du_N} \bigg|_{u_N} - K_u C \right) (u_N - D_N(u)) \\
 & \quad - \nabla_N \Delta_N^{-1} \left(\frac{dq_N}{du_N} \bigg|_{u_N} \right) (u_N - D_N(u)) \\
 & \quad - \nabla_N \Delta_N^{-1} \{ q_N(D_N(u)) - \Delta_N D_N(p) + \nabla_N^T f_N \} \\
 & \quad + g_N(D_N(u)) - D_N(g(u)) - \nabla_N(D_N(p)) + D_N(\nabla p) \\
 & \quad + K_u \varepsilon_u
 \end{aligned}$$

6. 計測融合シミュレーション(8)

$$\begin{aligned}
 \frac{d}{dt}(u_N - D_N(u)) = & \left(\frac{dg_N}{du_N} \Big|_{u_N} - K_u C - \nabla_N \Delta_N^{-1} \frac{dq_N}{du_N} \Big|_{u_N} \right) \times (u_N - D_N(u)) \\
 & - \nabla_N \Delta_N^{-1} \{ q_N(D_N(u)) - \Delta_N D_N(p) + \nabla_N^T f_N \} \\
 & + \underline{\underline{g_N(D_N(u)) - D_N(g(u)) - \nabla_N(D_N(p)) + D_N(\nabla p)}} \\
 & + K_u \varepsilon_u
 \end{aligned} \tag{6.10}$$

式(6.10)が、計測融合シミュレーション式(6.1),(6.7)における、速度誤差($u_N - D_N(u)$)の漸近挙動を記述する近似式である。

圧力誤差($p_N - D_N(p)$)の漸近挙動については、式(6.9)で与えられている。

$$\begin{aligned}
 p_N - D_N(p) = & \Delta_N^{-1} ((dq_N / du_N)|_{u_N})(u_N - D_N(u)) \\
 & + q_N(D_N(u)) - \Delta_N D_N(p) + \nabla_N^T f_N
 \end{aligned}$$

Appendix 境界条件

(1) Navier-Stokes式

Navier-Stokes式(1.1)は、放物型であるので、初期値問題及び初期値境界値問題について適正である。

(2) 圧力方程式

圧力方程式(1.3)は、楕円型であり、境界値問題に対して適正である。境界条件式(1.5)の式(1.5.1)を圧力の条件に変換する。

境界条件式(1.5.1)より、 ∂V_1 上の $\partial u / \partial t$ が任意の時刻で与えられるので、式(1.1)より

$$\nabla p|_{\partial V_1} = \left\{ -\frac{\partial u}{\partial t} - (u \cdot \nabla)u + \nu \Delta u + f \right\} \Big|_{\partial V_1} \tag{a.1.1}$$

上式は、圧力方程式(1.3)のノイマン条件を与える。

したがって、境界条件(a.1.1),(1.5.2)により圧力方程式は解ける。

(3) 定常Navier-Stokes式(補足)

定常Navier-Stokes式は、楕円型となり、境界条件が必要となる。

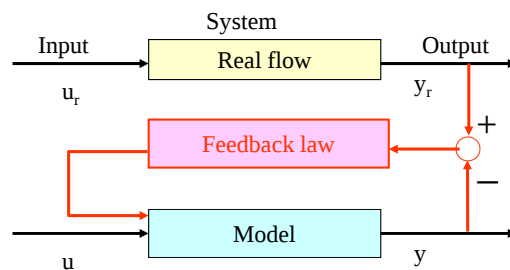
3. 計測融合シミュレーションによる血流解析

内容

- 3.1 はじめに
- 3.2 超音波計測融合シミュレーション
- 3.3 MR計測融合シミュレーション
- 3.4 解析結果のデモ
- 3.5 おわりに

3.1. はじめに

計測融合シミュレーションの構造



モデル		フィードバック設計	
オブザーバ	線形微分方程式	極配置	Luenberger (1964)
カルマンフィルタ	線形微分方程式	最適設計	Kalman (1960)
計測融合シミュレーション	CFD モデル	試行錯誤	

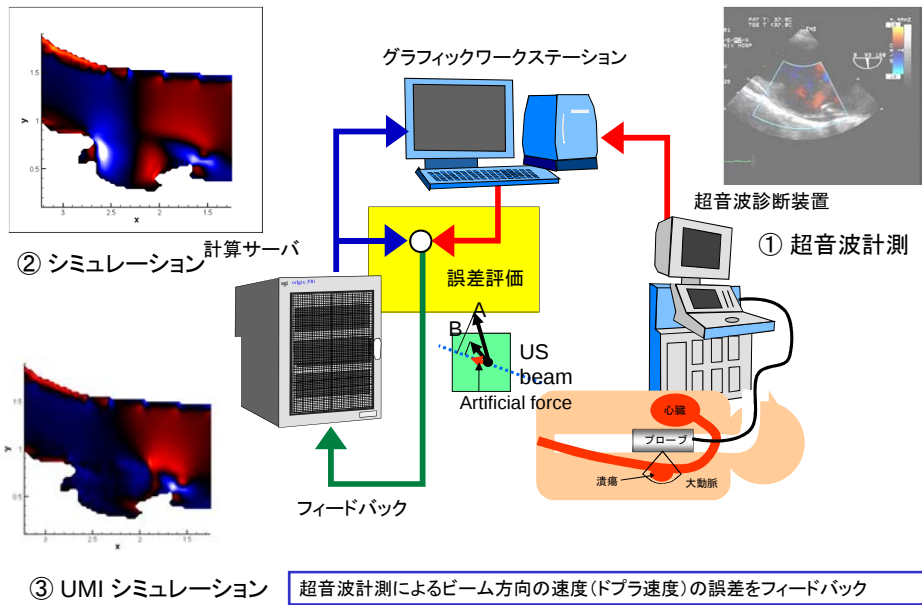
画像診断機器の特徴

	長所	短所
X線診断装置	空間分解能、時間分解能が最も高い(0.2 mm、33 ms)	放射線被曝
超音波診断装置	- 空間分解能(体表面)、時間分解能が高い - 生体に悪影響を与えない - 血管形状と血流速の測定が可能	- コントラストが低い - 空気や骨の界面の後ろは観察できない
CT	3次元データが得られる - コントラストがX線診断装置より高い	放射線被曝
MRI	3次元データが得られる - 軟部組織のコントラストが高い - 速度分布の計測が可能(PCMRI) - 骨の陰影がない	- 空間分解能、時間分解能は比較的低い - 高額

血管内の圧力分布や壁せん断応力の正確な計測は困難

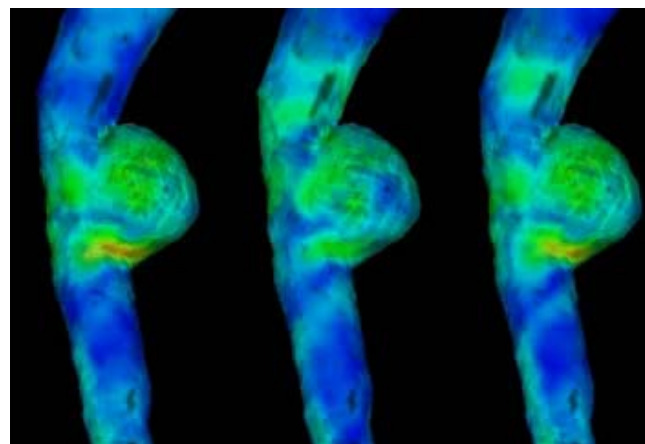
3.2 超音波計測融合シミュレーション

超音波計測融合シミュレーションシステム



51

数値実験による有効性の検証



(a) 基準解

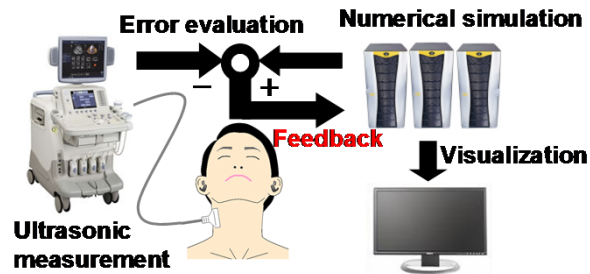
(b) 通常のシミュレーション

(c) UMI シミュレーション

血管壁せん断応力の比較

52

頸動脈内血流の2D解析（臨床応用）



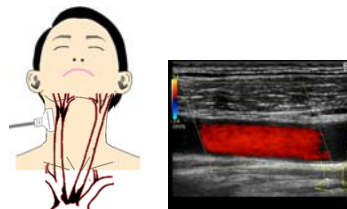
臨床用2D超音波計測融合 (UMI) シミュレーションシステム

53

緒言

頸動脈

- 動脈硬化の好発部位
- 超音波診断
- 内中膜厚さ (IMT)
 - 動脈硬化の診断
 - 予測パラメータ?



2D-UMI シミュレーションシステム

- 超音波診断装置
- 2D血流解析

目的

- 動脈硬化の予測パラメータ



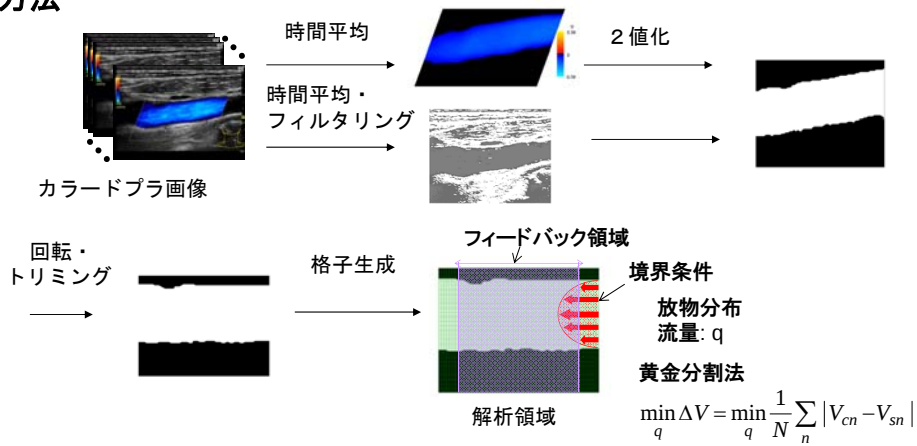
54

2D UMI シミュレーションシステム

構成

- 超音波診断装置 (LOGIC 7, GE)
- 計算サーバ (Altix, SGI)

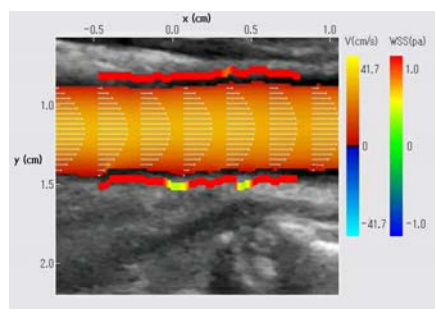
方法



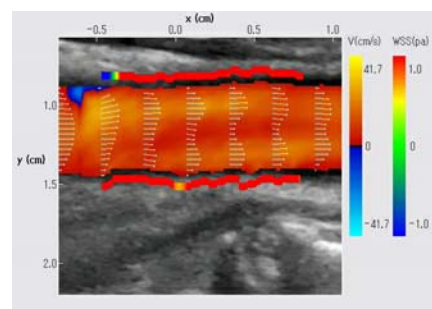
55

結果

フィードバックの効果



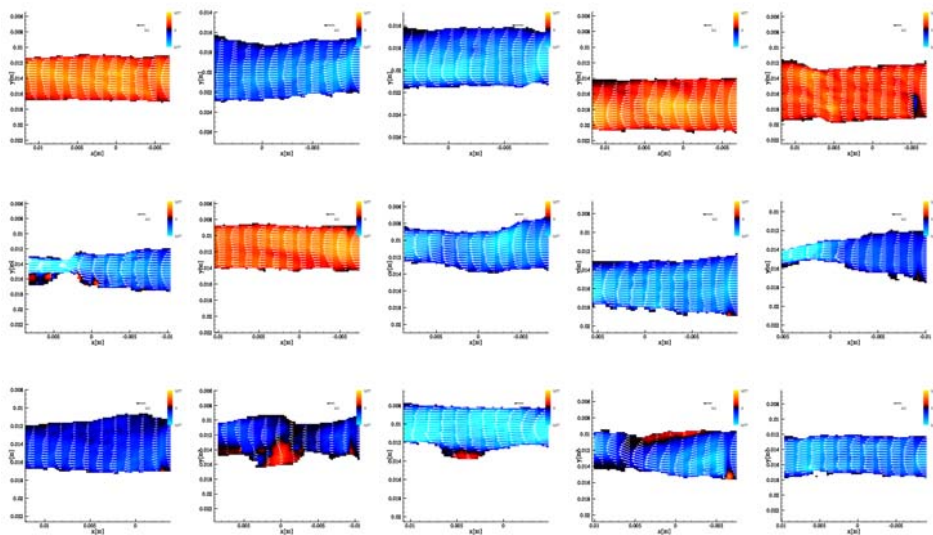
通常のシミュレーション
 $e = 6.7\%$



UMI シミュレーション ($K_v^* = 100$)
 $e = 2.5\%$

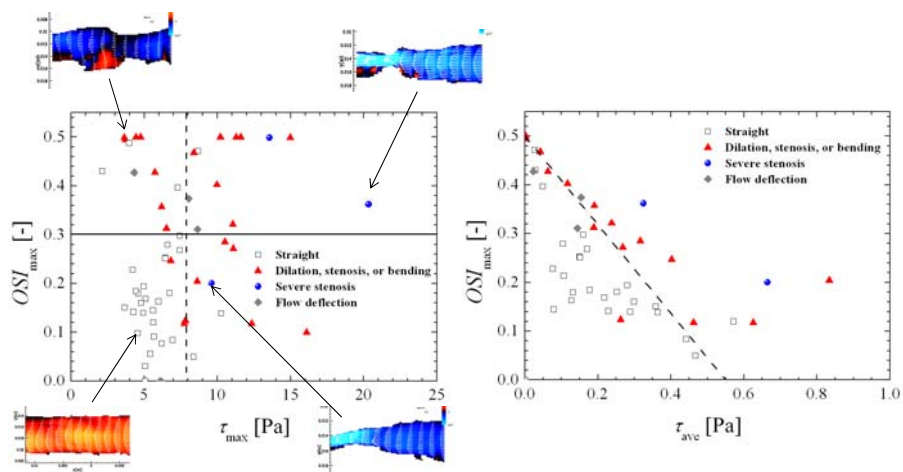
56

結果 臨床データの解析 13名, 73 例



57

結果 血行力学パラメータ



OSIの最大値と壁せん断応力の最大値

OSIの最大値と壁せん断応力の平均値

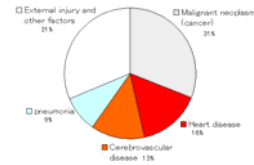
58

小動物用超音波計測連成血流解析システムの開発

背景

循環器系疾患

- ・ 死亡原因の1/3
- ・ 疾患と血流の関係



生体内の血流情報

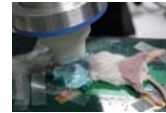
- ・ 医用画像診断装置（CT、MRI、超音波・・・）
- ・ 数値シミュレーション
- ・ 超音波計測融合シミュレーション

小動物用超音波計測連成血流解析システム

目的

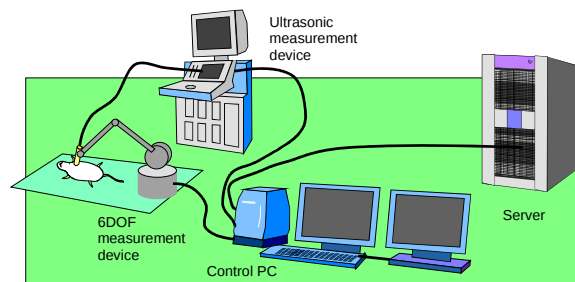
小動物用超音波計測連成血流解析システム

- ・ マウス頸動脈を対象
- ・ 通常のシミュレーションと比較による有効性の検証



59

小動物用超音波計測連成血流解析システム



解析の流れ

1. 血管断面の超音波Bモード計測（血管軸方向にスイープ）
2. 超音波カラードブラ計測（プローブ固定）
3. Bモード計測画像より3次元血管形状抽出、計算格子生成
4. カラードブラ計測画像より断面積とドブラ速度分布を抽出
5. UMI流体構造連成解析

60

UMI流体構造連成解析の基礎式

ナビエ・ストークス式

$$\frac{\partial \mathbf{u}}{\partial t} = -(\mathbf{u} \cdot \nabla) \mathbf{u} + \nu \Delta \mathbf{u} - \nabla p + \mathbf{f}$$

圧力方程式

$$\Delta p = -\nabla \cdot ((\mathbf{u} \cdot \nabla) \mathbf{u}) + \nabla \cdot \mathbf{f}$$

フィードバック力

$$\mathbf{f} = -K(V - V^*)(\mathbf{e}_b \cdot \mathbf{e}_x) \mathbf{e}_x U / L$$

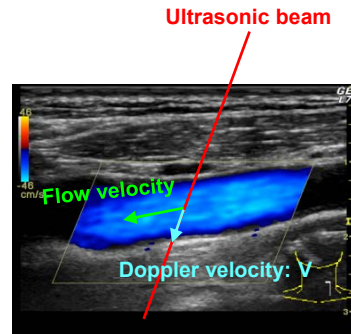
血管変形

$$\frac{dy_w}{dt} + \frac{0.2E}{C_{vis} R_0} y_w = \frac{1}{C_{vis}} (P_w - P_{w0})$$

境界条件

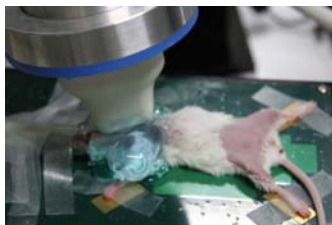
上流端：一様平行流（大きさはドプラ速度誤差より不動点反復法）

下流端：自由流出（1点の圧力を断面積時間変化と最高・最低血圧より）

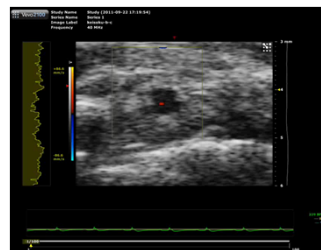


61

マウス頸動脈の解析



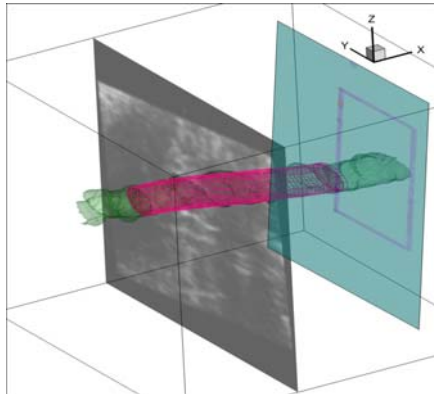
実験の様子



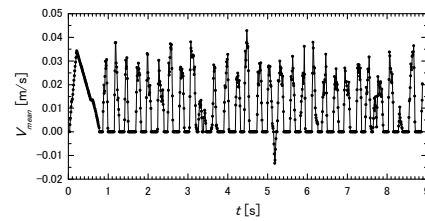
頸動脈カラードプラ計測結果

62

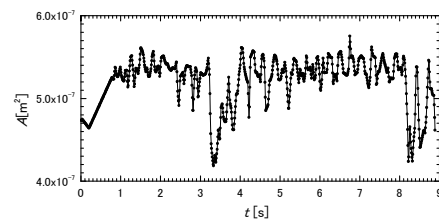
超音波計測結果



頸動脈血管形状抽出結果



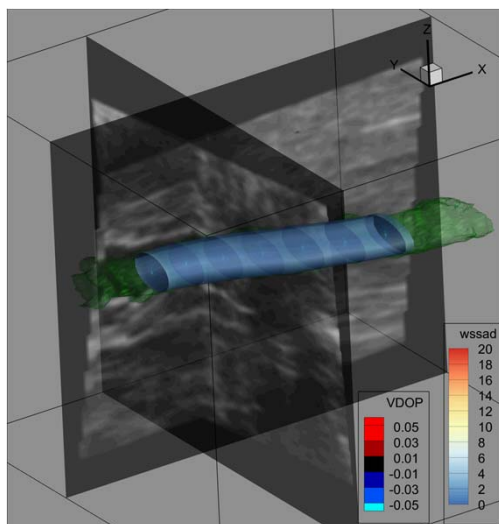
断面平均ドプラ速度



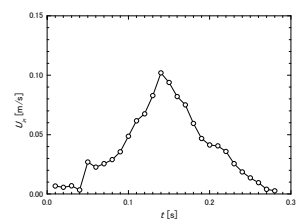
血管断面積

63

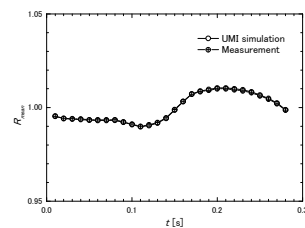
UMIシミュレーション結果



マウス頸動脈血流動態のリアライゼーション



上流端断面平均流速

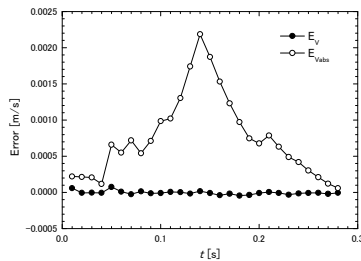


平均無次元血管半径

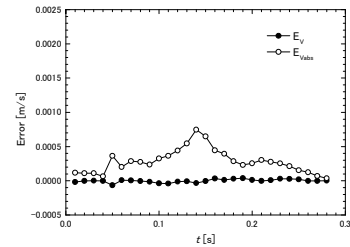
64

通常のシミュレーションとUMIシミュレーションの比較

通常のシミュレーション



UMI シミュレーション



ドブラ速度誤差の時間変化



速度ベクトル分布

65

結言

小動物用超音波計測連成血流解析システム

- ・ マウス頸動脈の解析
- ・ 通常のシミュレーションとの比較
- ・ 信頼性の保証された解析結果

今後の課題

- ・ 循環器系疾患の機序の解明
- ・ 臨床応用

66

3.5 おわりに

将来展望

(1) 医療分野への計測融合解析の応用

1. 循環器系疾患研究の新展開
➢ マウス実験による循環器系疾患の原因解明と治療法開発
2. 医療画像診断装置の性能向上
➢ 超音波診断装置に応用して高度診療を実現
➢ MRI装置の計測精度を大幅に向上



(2) 他分野への計測融合解析の応用

1. 原子カプラントの異常同定システム
2. 航空機の乱気流予測制御システム
3. 超小型スパコン開発による携帯型
高度診断装置や建築物内気流制御



4. まとめ

1. はじめに
2. 計測融合シミュレーションの理論的枠組み
 - 2.1 シミュレーションによる実現象の再現
 - 2.2 順問題と逆問題
 - 2.3 計測融合シミュレーションの定式化
3. 計測融合シミュレーションによる血流解析
 - 3.1 はじめに
 - 3.2 超音波計測融合シミュレーション
 - 3.3 MR計測融合シミュレーション
 - 3.4 解析結果のデモ
 - 3.5 おわりに
4. まとめ

END

<http://www.ifs.tohoku.ac.jp/sme/index-j.htm>